ほぼ週刊コラム　Partnership論　その２１５

**シリーズ：『米国Partnership税制勉強会』**

**第二十九回勉強会（通年内容は**[**年表rev.9**](http://llc.a.la9.jp/Papers/evolution%20history/evolution%20history%20of%20US%20partnership%20taxation%20rev9.ppt)**参照方）の準備**

**divine right of kingsのdivineは、rightでなくright of kingsを修飾する**。

20161124 rev.1 齋藤旬

[**Inventing the People**](https://www.amazon.com/Inventing-People-Popular-Sovereignty-England/dp/0393306232/ref=sr_1_1?ie=UTF8&qid=1477553338&sr=8-1&keywords=Inventing+the+People)**の**[**半訳作業ファイルwork**](http://llc.a.la9.jp/Papers/Inventing%20the%20people/Inventing%20the%20people%20HanYaku%20work5.docx)**5を作成した。**

1．The Divine Right of Kings　神授王権 12

今週はこれらを和訳した。

**読者から「divineが“神の”という意味であれば、divine rightでは意味が重複する」というコメントを頂いた**。先週取り上げた「rights are simply right」の解説で、rights（権利）の起源は神の右の座（seat at the Right Hand of God）に着く者の正当性と説明したので、このコメントは当を得ている。神の神の正しさ？　冗長だ、変だ、という疑問。

　結論から言うと、divine right of kingsのdivineは、rightでなくright of kingsを修飾する。即ち、王権（right of kings）は神が裏打ちしたもの、というProtestant kingsの少し苦しい弁明をこのdivine right of kingsは表している。

**神が改めて裏打ちしなくとも、元々right（権利）の正当性（righteousness）は神が既に裏打ちしたもの、と当時の人は考えていた**。だからもし本当にProtestant kingsの王権が、神が裏打ちしたものであれば、わざわざdivineをつける必要はない。だいたい「正真正銘」とつくものほど怪しい。これもその伝。Protestant kingsは王権の出所に今ひとつ自信がないからこそdivineと銘打った。

　なぜ自信がないかというと、それはCatholicが対抗宗教改革（Counter Reformation）を16世紀中頃から始めたからだ。エラスムスが『愚神礼讃』で批判した様に確かに15世紀から16世紀初頭のCatholic聖職者は堕落していた。だからルターは1517年に95箇条の質問状を公開して宗教改革（Reformation）を始めた。この宗教改革で生まれたProtestantに多くのCatholicキリスト教徒達が改宗した。Protestant kings or queensは人々から大きな支持を得た。恐らくCatholic kings or queensよりも人気があった。

　ところがCatholicからも自浄の対抗宗教改革（Counter Reformation）が始まった。改革派の[イエズス会](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%82%A8%E3%82%BA%E3%82%B9%E4%BC%9A)が1534年に設立され[[1]](#footnote-1)、Catholic kings or queensが治めるスペイン・ポルトガルの勢いが増していった。日本にイエズス会神父フランシスコ・ザビエルが来てCatholic布教を開始したのも、「以後良く広まるキリスト教」と覚える1549年のことだ。

　こうした形勢変化が本格化した17世紀初頭、a Protestant kingであるJames I（在位：1603-1625）が打開策としたのが、right of kingsにわざわざdivineをつけることだった。

**重要なのは、この「窮余の一策」が、意外にも、逆転ホームランを放つことだ**。

即ちdivine right of kingsという即席冗長表現が「rights are simply right」という社会公理を人々に見出させ、その様な人々が「the people」になってdemocracyを打ち立てていく。私は、これが本書*Inventing the People*の主題だろうと見当をつけている。

なお、「rights are simply right」という社会公理を人々が見出し、その様な人々が「the people」になってdemocracyを打ち立てていく背景には、divine right of kingsからdemocracyへと流れる展開よりも、科学革命[[2]](#footnote-2)の方が、影響力が大きかったのではという意見もある。水野和夫氏が近著[『株式会社の終焉』](https://www.amazon.co.jp/ebook/dp/B01LXOV0PY/ref=tmm_kin_swatch_0?_encoding=UTF8&qid=&sr=)の中で、この様なコメントをしている。

　しかし、政治と経済を分けて考えた方が良いのではないだろうか。政治進化では、divine right of kings→rights are simply right→the people→democracyと進んでいく。他方、経済進化では、right order of this worldを指標にしたinvestiture contest→1543年コペルニクス『天体の回転について』出版によりcosmic view（秩序ある宇宙観）が崩壊→the goodよりもthe usefulの方が価値が大きい→功利主義→効用関数（utility function）による経済、と進んでいく。即ち、経済の方が政治よりも科学革命の波をもろに被ったのだろう。

**確かに、政治改革においても経済改革においてもCatholicよりもProtestantの方が優位であった**。植民地獲得において当初はCatholic宗主国がリードしていたがその後イギリスやオランダなどのProtestant宗主国が逆転する。産業革命においては当初からProtestant宗主国の方が分が良かった。なにがこの違いを生んだのか、考えるのは確かに面白い。

しかし、長年おつきあいいただいている読者はお気づきだろうが、政治も経済も「21世紀以降の進化予想」、即ち、democracyのその後の進化（例えば、多数決型民主主義から熟議型民主主義へ）と、経済のその後の進化（例えば、the useful重視の経済からthe good重視の経済へ）との方が、私にとって興味深い。しかも来年2017年は1517年ルター宗教改革開始から500年。ProtestantとCatholicが違いを越えて[『争いから交わりへ』](https://www.amazon.co.jp/%E4%BA%89%E3%81%84%E3%81%8B%E3%82%89%E4%BA%A4%E3%82%8F%E3%82%8A%E3%81%B8%E2%80%952017%E5%B9%B4%E3%81%AB%E5%AE%97%E6%95%99%E6%94%B9%E9%9D%A9%E3%82%92%E5%85%B1%E5%90%8C%E3%81%A7%E8%A8%98%E5%BF%B5%E3%81%99%E3%82%8B%E3%83%AB%E3%83%BC%E3%83%86%E3%83%AB%E6%95%99%E4%BC%9A%E3%81%A8%E3%82%AB%E3%83%88%E3%83%AA%E3%83%83%E3%82%AF%E6%95%99%E4%BC%9A-%E4%B8%80%E8%87%B4%E3%81%AB%E9%96%A2%E3%81%99%E3%82%8B%E3%83%AB%E3%83%BC%E3%83%86%E3%83%AB-%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%9E%E3%82%AB%E3%83%88%E3%83%AA%E3%83%83%E3%82%AF%E5%A7%94%E5%93%A1%E4%BC%9A/dp/4764264579)と協調しようとしている。二百数十年前の産業革命の要因でなく、これからの[第四次産業革命](http://llc.a.la9.jp/Papers/IR4/The%20Fourth%20Industrial%20Revolution%20by%20Klaus%20Schwab%20fd02.docx)の要因を検討すべきだと私は考える。　　　　　　　　　今週は以上。来週も請うご期待。

1. 当初からイエズス会はルターが唱えた万人司祭に肯定的。万人司祭：the priesthood of all believers は、righteousnessをdiscern（心の眼で識別）するpowerはthe pope, bishops and priestsまででなくall believersにまでendowされるとする考え方。後にthe peopleの概念を生み出し更にdemocracyを生み出すことになる。約500年後の2013年、イエズス会出身初の[教皇フランシスコ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%82%B7%E3%82%B9%E3%82%B3_(%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%9E%E6%95%99%E7%9A%87))が[theology of the people](http://llc.a.la9.jp/Column%20hobo-shuukan/2016/20160603%20W191%20Theology%20of%20the%20people/20160603%20W191%20Theology%20of%20the%20people%20rev1.docx)を生み出したのも当然と言える。 [↑](#footnote-ref-1)
2. [バターフィールド『科学革命』](https://www.amazon.co.jp/%E8%BF%91%E4%BB%A3%E7%A7%91%E5%AD%A6%E3%81%AE%E8%AA%95%E7%94%9F-%E4%B8%8A-%E8%AC%9B%E8%AB%87%E7%A4%BE%E5%AD%A6%E8%A1%93%E6%96%87%E5%BA%AB-288-%E3%83%8F%E3%83%BC%E3%83%90%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%BB%E3%83%90%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%83%89/dp/4061582887)によれば、1543年コペルニクス『天体の回転について』出版から1687年ニュートン『プリンキピア』出版までの約140年間に、「地上のもの」と「天上のもの」とで構成されるキリスト教的cosmic view（秩序ある宇宙観）が崩壊する一方、他方で、現実の世界を積極的に肯定し「地上のもの」を優位とするexistential world view（実存主義的世界観）が打ち立てられていく。この変化を「科学革命」と呼んでいる。 [↑](#footnote-ref-2)